はじめに――「闘争」の政治学

二一世紀の世界は「闘争」に満ちている。二〇〇一年九月一一日、ニューヨーク世界貿易センターの白煙は、新時代到来を告げる狼煙となった。S・ハンティントン「文明の衝突」論が再び話題となり、トルコや南欧諸国に押し寄せた難民の奔流は、欧州に変容を促した。経済統合から政治統合へと進み、「大統領」職設置や「憲法条約」審議まで試みていた欧州連合（EU）だったが、指導国のドイツ連邦共和国がいち早く難民申請受付を表明すると、難民流入に直面するイタリア、ギリシア、ハンガリーなどとの間に亀裂が走った。イギリスは国民投票でEU離脱を決め、スコットランド、北アイルランドでは紛争が再燃しつつある。ギリシアやポーランドは、「過去の克服」の模範国だったはずのドイツに、新たに戦時賠償を求め始めた。ドイツ国内でも、財政の傾いた南欧諸国のドイツ依存や、移民・難民の際限ない流入を批判し、ドイツ国家の主体性を求める新興政党「ドイツのための選択肢」が、五パーセント条項の障壁を越えて各州議会、次いで連邦議会に進出した。メルケル連邦宰相は二〇二一年の退陣を予告し、その後のドイツおよび欧州の指導体制は見えていない。ロシア連邦は、冷戦終焉後に続いた西

欧勢力の東漸に憤慨し、クリミア併合で反転攻勢に出た。冷戦後世界の単独覇権国だったアメリカ合衆国は、対イスラム戦争や中華人民共和国の台頭で余裕を失い、あるいはB・オバマ政権の成立やH・ロダム・クリントンの立候補といった「リベラル」台頭への反動から、「アメリカ第一」を呼号するD・トランプを大統領に選出し、孤立主義に回帰し始めた。東アジアでは、中華人民共和国が周辺諸国に脅威を与え、朝鮮半島情勢も流動化している。対米敗戦後、日米同盟に安住してきた日本も、アメリカ退潮のなかで、将来構想の練り直しを余儀なくされている。二〇二〇年初頭、武漢に端を発した新型コロナ・ヴィールスは、瞬く間に世界を席捲した。「グローバル化」を謳歌する雰囲気は消え、各国は国境を閉鎖し、「例外状態」の様相を呈してきた。

この新しい「闘争」の最中に、奇しくも法学者・経済学者・社会学者マックス・ヴェーバー（一八六四―一九二〇年）が歿後百周年を迎えた。E・トレルチュも述べたように、ヴェーバーの学問業績はいかに深遠に見えても外皮であり、その内側には政治の人ヴェーバーがいた。その彼の鍵概念こそ「闘争」(Kampf)である。「闘争」とは同輩の抵抗を排して自分の意志を貫徹する行為であり、物理的暴力を用いない場合は「競争」と呼ばれる(I23: 192ff.)。ヴェーバーにとって「闘争」とは、「主体性」を錬磨するのに必要な道場だった。主体性とは、自立性でもあり攻撃性でもある。「近代」(フランス革命から世界大戦まで)は、際限のない「闘争」、つまり階級

対立・民族対立・列強角逐の時代であり、ヴェーバーはその渦中で人々の闘志を煽った。このヴェーバーこそ、国民社会主義（Nationalsozialismus、いわゆる「ナチズム」）で最高潮を迎えるドイツ・ナショナリズム史の一里塚であり、二一世紀の「闘争」状況とも通じる人物である。

本書は、このマックス・ヴェーバーの「人格形成物語」（Bildungsroman）を描く試みである。その狙いは、個別作品の鑑賞ではなく、それを生み出した文脈、つまりヴェーバーの生涯およびそれを取り巻く歴史的文脈の解明にある。こうした手法的転換を、本書では「伝記論的転回」（biographische Wende/biographical turn）と呼んでいる。本書は伝記研究であるため、人名や科目名などを詳しく記載する方針を採っている。なおドイツ史研究として、ドイツ語地名は基本的にドイツ語発音で記載することにしている。

本書はドイツの『マックス・ヴェーバー全集』（MWG: Max Weber-Gesamtausgabe）に依拠している。この『全集』は、ヴェーバーの著作を収集し、校閲しただけでなく、書簡、講義録、学生の論文評価、大学への献策、訴訟の資料などに至るまで、その知的軌跡の網羅的収録を目指したもので、近年ほぼ完結した。この『全集』に典拠がある場合は、頁数を略記した（「II: 20f.」「II5: 202ff.」とは、「MWG I/1の二〇・二一頁」「MWG II/5の二〇二頁以下」の意味）。なおIは著作篇、IIは書簡篇、IIIは講義篇である。引用部の強調は原文のもので、また引用中の表現は、史料としての性格から著者の意図を尊重して訳した。

ヴェーバー家

- マックス・ヴェーバー（父）一八三六―一八九七 ＝ ヘレーネ・ファレンシュタイン 一八四四―一九一九
  - マックス・ヴェーバー（子）一八六四―一九二〇 ＝ マリアンネ・シュニットガー 一八七〇―一九五四
  - 女（早世）
  - アルフレート・ヴェーバー 一八六八―一九五八
  - カール・ヴェーバー 一八七〇―一九一五
  - 女（早世）
  - クララ・ヴェーバー 一八七五―一九五三 ＝ エルンスト・モムゼン
  - アルトゥール・ヴェーバー 一八七七―一九五二 ＝ ファルボルグ・ヤーンなど
  - リリ・ヴェーバー 一八八〇―一九二〇 ＝ ヘルマン・シェーファー
- カール・ダーフィット・ヴェーバー 一八二四―一九〇七
  - アンナ・ヴェーバー 一八五一―一八七三 ＝ エドゥアルト・シュニットガー 一八四四―一九〇三

MWG 第二部付録より作成

ファレンシュタイン家

- ヘルマン・バウムガルテン 一八二五―一八九三
  - イダ・ファレンシュタイン 一八三七―一八九九
    - フリッツ・バウムガルテン 一八五六―一九一三
    - オットー・バウムガルテン 一八五八―一九三四
    - 男(早世)
    - 女(早世)
    - エミー・バウムガルテン 一八六五―一九四六
  - ヘンリエッテ・ファレンシュタイン 一八四〇―一八九五
    - アドルフ・ハウスラート 一八三七―一九〇九
  - 男
    - マックス・ヴェーバー(父) 一八三六―一八九七
  - ヘレーネ・ファレンシュタイン 一八四四―一九一九
  - エミーリエ・ファレンシュタイン 一八四六―一九二二
    - エルンスト・ヴィルヘルム・ベネッケ 一八三八―一九一七
  - エドゥアルト・ファレンシュタイン 一八四八―一八七一
- エミーリエ・スーシェ 一八〇五―一八八一
- ゲオルク・フリードリヒ・ファレンシュタイン 一七九〇―一八五三
- エリザベート・ベネッケ 一七九二―一八三一
  - 男
  - 男
    - オットー・ファレンシュタイン
      - エミリー・ファレンシュタイン 一八五〇―一八八三
      - オットー・フォン・クロック
      - ラウラ・ファレンシュタイン 一八六三―一九三〇
  - 女
  - 男
    - エリザベート・ファレンシュタイン 一八二七―一九〇一
      - ユリウス・ヨリー 一八二三―一八九一

MWG 第二部付録より作成

1917 年のマックス・ヴェーバー

目　次

はじめに――「闘争」の政治学　……1

第一章　主体的人間への成長　一八六四―一八九二年　……2

1　絶頂の西洋・勃興するドイツでの誕生　2
2　自由主義政治家の家庭での生活　7
3　プロテスタント世界での知的冒険　12
4　学校での精神的・身体的成長　19
5　プロイセン軍での鍛錬　25

第二章　社会ダーウィニズムへの傾倒　一八九二―一九〇四年　……29

1　法学博士号・教授資格の取得　30
2　ドイツ東部農業論からポーランド人労働者排除論へ　34
3　法学から経済学への重心移動　41

4 フライブルク講演『国民国家と経済政策』 48
5 ハイデルベルクでの変調と教職からの早期引退 56

第三章 ドイツ社会への苛立ち 一九〇四―一九一四年 …… 69
1 アメリカ旅行でのドイツ人意識の強化 70
2 禁欲的プロテスタンティズムの分析 75
3 人種論への更なる興味 85
4 「市民層の封建化」批判 92
5 「官僚制」批判 98
6 学問のあり方をめぐる論争 106
7 ロシア自由主義派への愛憎 133
8 西洋近代から見た普遍史の展望 142
9 「ハイデルベルクのミュトス」と相次ぐ紛争 150

第四章 ドイツの名誉のための闘い 一九一四―一九二〇年 …… 161
1 世界大戦とドイツ文化の自己保存 162
2 戦争遂行のための内政改革構想 175
3 ドイツの道義的糾弾への抗議 180

4　国民国家再建のための共和国制構想　194
5　ミュンヒェンでの一瞬の輝き　203
終章　マックス・ヴェーバーとアドルフ・ヒトラー……215
おわりに　ヴェーバー研究の伝記論的転回　225
主要文献一覧　235
図版出典一覧　241
マックス・ヴェーバー略年譜

第一章　主体的人間への成長　一八六四―一八九二年

1　絶頂の西洋・勃興するドイツでの誕生

「昨日夕刻、我が愛する妻ヘレーネ(旧姓ファレンシュタイン)は、無事に力強い男子を出産した。エルフルト　一八六四年四月二二日　都市参事会員・博士マックス・ヴェーバー」

誕生

M・ヴェーバー(マクシミリアン・カール・エミール・ヴェーバー)の「力強い」誕生を告げるこの『国民新聞』の広告は、彼の闘いの人生を予感させるものだった。

ヴェーバーは自由主義政治家の父マックス、敬虔なカルヴィニストの母ヘレーネの間に第一子として生まれ、絶頂の西洋・勃興するドイツの只中を生きた。大学に入ったヴェーバーは、兵役でプロイセン軍に出仕し、博士号を取って法曹となり、やがて大学教授を目指す。本章では、就職までのヴェーバーの軌跡を見ていく。

西洋による世界統一

一九世紀半ば、西洋の勢力は絶頂に達していた。西洋は、産業革命で巨大な経済力・軍事力を手にし、世界の他文明を圧倒した。また西欧(英米仏)は、市民革命で自由、平等、人権、民主主義といった理念を掲げ、これを「普遍的価値」として世界に広める「道徳的征服」を始めた。物質的にも理念的にも勢いを増した西洋は、アフリ

カや中近東に進出し、東アジアにも及んだ。イギリスは、フランスとインドや東南アジアの利権を競い、オランダを追って鎖国下の長崎港に乱入し、セポイの蹶起を契機とするインド大反乱を圧伏し、阿片戦争で清国から香港などを奪取した。ロシアは千島列島を襲撃し、アメリカは艦砲を轟かせて日本に開国を強要した。世界は西洋(西欧)を中心として一体化し、政治・経済から学問・芸術・食事・衣服・髪型まで西洋(西欧)流が世界標準となる「グローバル化」の時代が始まったのである。

図1　マックスおよびアルフレート・ヴェーバー兄弟の「生家」(エルフルト)

ただ西洋は一体ではなかった。「デモクラシーの帝国」フランスは、軍人皇帝ナポレオン一世のもと欧州大陸を席捲し、イギリスやロシアまで屈服させようとした。フランスの敗北後に成立したメッテルニヒのヴィーン体制は、大国間勢力均衡による平和維持を図ったが、のちにナポレオン三世の侵略主義が現れて動揺をきたした。こうしたフランスの膨張主義に、いつも待ったをかけたのがイギリスである。世界大国イギリスは、すでに海上競争でスペイン、ポルトガル、オランダを降していた。イギリスはハノーファー選帝侯国と同君連合(同一君主を頂く国家連合)で、ドイツの有力領邦エステルラ

イヒ（英語ではオーストリア）、プロイセン（英語ではプロシア）と交互に同盟を結んで対仏戦争を展開した。

ドイツの主体性確立

周辺諸国の蹂躙を受け続けたドイツは、一九世紀に団結および台頭の時期を迎える。中世ドイツは古代ローマ帝国を継承した神聖ローマ帝国の中核地域であり、ドイツ王は欧州の政治的最高権威たるローマ皇帝を兼ねた。ところが近世になると、帝国は宗教改革で分裂し、フランス・トルコ（オスマン帝国）の挟撃に遭った。フランス、スウェーデン、のちにはさらにロシアが帝国国制の「保証国」となり、帝国政治に介入した。フランスの侵略はフランス革命で最高潮に達し、ナポレオンはドイツの中小領邦にライン同盟結成を強要し、神聖ローマ帝国を崩壊せしめた。このフランスによるドイツ支配は、フランスのような外的脅威に対抗するドイツ国民国家を、フランスを参考に構築しようという対抗運動を生むことになる。一八六六年にドイツ戦争（普墺戦争）が勃発すると、新興国プロイセンがドイツ連邦を破壊して議長国エステルライヒを降し、ドイツ国家統一の主導権を奪取した。一八七〇年にスペイン王位継承問題のこじれから、フランスがプロイセンに宣戦布告すると、多くのドイツ諸国はプロイセンと連帯してフランスに決戦を挑み、エステルライヒもそれを容認した。ドイツ皇帝が一八七一年一月一八日にヴェルサイユ宮殿で即位宣言をしたのは、数百年続いたフランスの侵略に対するドイツ諸国の意趣返しである。フランスはこれで永遠に欧州での覇権

を失ったが、国内で新興国ドイツへの復讐心を募らせ、やがて中世以来の宿敵だったイギリスと接近するに至る。

ドイツ帝国やエステルライヒなどを含めたドイツ語圏の発展は著しかった。経済ではドイツ帝国はイギリスを凌駕し、アメリカに次ぐ工業大国となりつつあった。遅ればせながらドイツ帝国も植民地を獲得し、ピジン・イングリッシュのようなドイツ語の言語的変容も始まった。学術部門ではドイツ語圏の研究者が先駆的成果を次々に生み出し、ドイツ語が国際学問語として普及し始め、ドイツ語圏の大学が欧州内のみならず英米圏やアジアから留学生を集めた。ドイツ語圏の学界では、医学、法学、神学、哲学、歴史学などが全盛期を迎えながら、近代の社会変化への興味から、経済学、社会学、心理学、人類学といった新しい学問も台頭した。初代帝国宰相としてドイツ帝国のかじ取りを担ったビスマルクは、超保守派の出身ではあったが、プロイセン首相となって間もなく社会主義運動の闘士F・ラサールと連絡を取り、のちには国民自由党を味方につけ、「統一と自由」を求める各種進歩派勢力と連携した。イギリス議会すら普通選挙を採用していない一九世紀後半、いち早く普通選挙法を導入したドイツ帝国議会では、増大する工業労働者を支持基盤としたドイツ社会民主党が第一党となり、分邦議会などにも進出しつつあった。皇帝の一存で任命される帝国宰相にも、予算・法律を決める帝国議会を無視した行政は不可能だった。このように一九世紀末のドイツは、当時の世界を見渡すならば、

いかなる意味でも先進国の一つであって、後進国では全くなく、欧州の周縁でもなかった。

ヴェーバーの立ち位置

絶頂の西洋・勃興するドイツはヴェーバーの知的営為の前提となった。前者は彼の宗教社会学の、後者は政治評論の出発点である。少年ヴェーバーには、家庭で歴史を描く趣味があり、「インド＝ゲルマン諸国民における民族の性格・民族の発展・民族の歴史についての考察」（一八七九年）では、F・v・シラーの概念を用いつつ世界諸民族の精神を比較している。その末尾では、自由を愛する「インド＝ゲルマン人」が称揚され、「セム精神」を象徴する専制でもなく、また共和制でもない「立憲君主制」に、国制の最終到達点が見出されている。それはどことなく、ゲルマン人の自由に至る世界史を回顧したG・ヘーゲル『歴史哲学講義』を連想させる展開であり、また当時流行の反ユダヤ主義とも共鳴する内容となっている。また少年ヴェーバーは、「シュタウフェン家」（一八七六年）、「ドイツ史の経過一般――特に皇帝と教皇との地位に留意して」（一八七七年）と、繰り返しローマ＝ドイツ皇帝に関する作文を書いているが、そこにはドイツ中世の偉大な君主への憧憬が綴られている（III1: 601–636）。一八七九年七月には、ヴェーバーは父マックス、長弟アルフレート、次弟カールと独仏戦争（普仏戦争）の古戦場をめぐり、軍事史家のように詳しい見聞録を従兄に送った。その翌年夏には、彼はグラーツ伯領やケーニヒグレーツなど、墺普対決の舞台を一人で旅行した（III1: 173ff, 209–231）。

2　自由主義政治家の家庭での生活

三つ巴の思想

フランス革命を契機に、欧州諸国では保守主義、自由主義、平等主義の争いが始まった。前近代の人間は、身分、職業、性別、宗教などによって権利・義務が異なることに慣れていた。だが近代になると、そもそも人間とは一般に生まれながらに自由で平等だという抽象的人間観が勢いを増していく。「そもそも人間とは一般に」という発想自体を疑い、地域の歴史のなかで育まれた秩序を重視する右派（保守派）を凌駕して、フランス革命後には欧州各国で、近代政治理念を唱道する左派（進歩派）が増大していった。だが左派は増大するにつれて内部分裂し、「自由」に重きを置く自由主義陣営と、「平等」に重きを置く平等主義陣営とに別れていった。平等主義の嚆矢は宗教寛容論および社会主義で、前者は宗教戦争を経た宗派共存の必要性から発達したが、後者は産業革命による社会経済的不平等の経験から発達した。二〇世紀以降、平等主義は多様化し、新しい潮流として性的平等主義、人種的平等主義、反西洋中心主義などが台頭した。

四つの部分社会

一九世紀後半のドイツの政治党派は四つの陣営に分かれていた。保守陣営（ドイツ保守党、自由保守党など）、自由主義陣営（国民自由党、進歩人民党など）、社会主義陣営（社会

民主党)、カトリック陣営(中央党)である。右派は、君主制や教会に寄り添いつつも、明確な社会的目標を掲げぬまま保守陣営に集まった。保守陣営は徐々に縮小していったが、当時は財産に応じた等級選挙が行われ、都市より農村を重視した選挙区割になっていたために、比較的長く議席数を維持した。自由主義陣営は、国家権力による個人の自由の制約には反対し、法治国家原理の徹底や法の下の平等を求めたが、教養や財産によって生じた階層分化は当然とし、君主制の存在も疑わず、民主主義には場当たり的な対応をした。二〇世紀に入ると、自由主義陣営は社会主義陣営に左派の主導権を奪われ、選挙で後退していく。社会的不平等の廃絶を目標とする社会主義陣営は、徹底した平等化のためには体制転覆や独裁も必要だと主張した。なおエステルライヒを除外したドイツ帝国で少数派に転落したカトリックは、その多くが思想・階級の違いを越えて一陣営をなし、中央党に結集した。つまり社会主義陣営、自由主義陣営、保守陣営に三分岐したのは、主としてプロテスタントであった。なお社会主義陣営、自由主義陣営、保守陣営は、労働者層、市民層、貴族層と同視されることも少なくない。だが実際には、社会主義に共感する貴族も、君主や教会に忠実な労働者もいた。

ドイツ・ナショナリズム(ドイツ人であると自負し、ドイツ的と思われるものを維持・拡大しようとする思考)は、この四つの陣営の全てに跨っていた。ドイツ国民国家形成運動の主役だった自由主義陣営は、ナショナリズムの熱心な担い手だった。彼らはイギリスを自由の国として崇敬する

こともあり、またギリシアやポーランドなど東欧の解放運動に共感を示すこともあった。保守陣営は、一九世紀半ばまではドイツ国民国家形成に消極的であったが、ドイツ帝国成立後は現実に順応し、自由保守党、ドイツ保守党はナショナリズムの担い手となっていく。カトリック陣営は当初エステルライヒを含む大ドイツ的国民国家を支持し、徐々に小ドイツ的なドイツ帝国にも順応したが、教皇を中心とする普遍的ネットワークを有したことから、「黒の国際派」と批判されることも多かった（聖職者の黒服に由来する）。社会主義陣営は、帝国主義戦争の批判者であり、「万国の労働者よ、団結せよ！」との主張もあって、「赤の国際派」だと非難されることもあった（革命家の赤旗に由来する）。だがその社会主義陣営も、各領邦に蟠踞する保守陣営を打倒するためにドイツ政治の統一化を求め、あるいはロシアなど専制国家から自衛するという意味で、ナショナリズムを肯定することがあった。ちなみに「金の国際派」（守銭奴の意味）、つまり法的には平等となっていたユダヤ系住民（ユダヤ教徒、元ユダヤ教徒およびその子孫）に対する違和感は、欧州社会の各所に伏在していたが、彼らのなかにはF・J・シュタールのような保守主義思想家も、F・ハーバーやL・ベルンハルトのような燃えるドイツ愛国者も、A・アインシュタインのような平和運動家も、K・アイスナーのような革命家もいた。

自由主義政治家の家庭

M・ヴェーバーは国民自由党政治家マクシミリアン・ヴィルヘルム・ヴェーバーの第一子として育った。父マックスは都市行政を専門とする地道な人物だっ

たが、子供たちに政治というものに触れ、国民自由党の巨頭たち（党指導者R・v・ベニクセン、プロイセン財務大臣J・v・ミーケル、ベルリン市長A・ホーブレヒト、プロイセン文書館長H・v・ジーベル、ベルリン大学教授（近代史）H・v・トライチュケ、同（古代史）T・モムゼンなど）と交流する機会を用意したと、のちに妻となったマリアンネは伝えている。当時の政治的・学問的エリートとの密接な交流により、ヴェーバーは知的劣等感のない生来のエリートとして育った。とはいえその交流の範囲は、おおむね自由主義陣営あるいは市民層という一つの「社会倫理的環境（ミリュー）」（M・R・レプシウス）のなかに留まっており、出会いの多様性に限界があったことは否めない。父はまた息子たちを旅行に連れ出し、ドイツ史の名所旧跡を見せた。さらに母方（ファレンシュタイン家）の伯父たちには有名人が多く、J・ヨリーはバーデン大公国首相であり、H・バウムガルテンはシュトラスブルク大学歴史学教授であり、A・ハウスラートはハイデルベルク大学神学教授であって、いずれも小ドイツ的統一や反カトリック闘争の闘士だった。

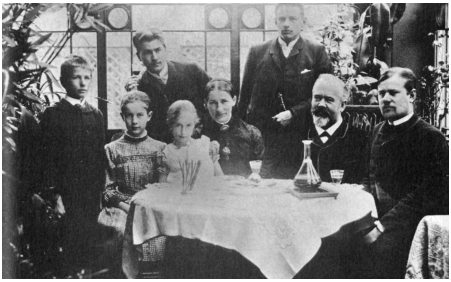

図2　ヴェーバー家（長男マックスは右端）